

25 橋をかける 〈皇后陛下〉

麗澤中学・高等学校教諭

1 主 題 集団生活の向上、役割と責任 <4-(4)>

2 本時の指導

- (1) ねらい 自分が属する集団の意義や自分の役割を考えさせる。また、社会や家族など集団生活の中で必要となる「愛」は本来「犠牲」と表裏一体のものであることに気づかせる。
- (2) 展 開

	学習活動と主な発問・期待する反応	教師の支援
A 価 値 の 追 求 ・ 把 握	1 皇后陛下について、どんなことを知っていますか。	・知っていることを発表させる。
	2 資料「橋をかける」前半部分を読ませる。(p.176～179-6行目)	
	3 p.178-7・8行目父がくれた神話伝説の本は、私に、個々の家族以外にも、民族の共通の祖先があることを教えたという意味で、私に1つの根っこのようなものを与えてくれました。』にはどのような意味があるのか。 ※補充資料①も読ませて考えさせる。	・御皇室と国民が共通のルーツを持ち、一つの家族として国を支え、発展させてきたことに気づかせる。 ・日本人は御皇室(大宅=公)を中心として、一つの家族という意識を持っていたことを理解させる。
	4 私達日本人にとって「皇室」とは何か。 ※紀宮様がお誕生日に際して述べられた言葉(補充資料②)を読んで考えさせる。	・紀宮様の言葉を読むことで、御皇室がいつの時代も、公の存在として、国民に心を寄せられてきたことに気づかせる。(必要があれば紀宮様のことについて生徒に説明する) ・阪神大震災、東日本大震災などにも触れ、その際の天皇皇后両陛下の姿から感じたことを発表する。
	5 p.178-2～4行目に、「一国の神話や伝説は、正確な史実ではないかもしれませんが、不思議とその民族を象徴します。これに民話の世界を加えると、それぞれの国や地域の人々が、どのような自然観や生死観を持っていたか、何を尊び、何を恐れたか、どのような想像力を持っていたか等が、うっすらとですが感じられます。」とあるが、皇后陛下がこう述べられた後に神話のエピソードを紹介されているということは、これからあげるエピソードが、日本人が共通して大切にしてきた精神の一つであると考えられることを伝える。	・神話の中には民族が大切にしてきた精神が様々な形で書かれていること、その代表として皇后陛下が「弟橘比売命」のエピソードを挙げられていることを生徒に説明して、そこに込められている精神が民族の伝統的な精神の一つであることを理解させる。

B 内 面的 自 覚	6 資料の後半部を読ませる。(p.179-8行目～181最終行まで)	・弟橘比売命のエピソードを整理して、生徒に理解させる。
	7 p.181-3～5行目、「はっきりとした言葉にならないまでも、愛と犠牲という二つのものが、私の中で最も近いものとして、むしろ一つのものとして感じられた、不思議な経験であったと思います」という部分を読ませて、皇后陛下がお考えになった「愛」について考えさせて発表させる(自分たちが考える「愛」との比較も含め)。	・弟橘比売命のエピソードから、なぜ皇后陛下が「愛」と「犠牲」というものを一つとして感じられたのか、美しいものとして感じられたのかを話し合う。その中で、現代に生きる私達は「愛」という言葉をどのように捉えているかについても話し合う。
	8 資料「橋をかける」を読んで感じたこと、気づいたことを感想として書かせる。	・本資料を通して学んだことや感じたことを、ワークシートに記入させる。
終 末	9 教師自身の感想を話し、余韻を持って授業を終わる。	・教師の話聞きながら、自身を振り返り、自問や内省を深めさせたい。

【補充資料①】平泉澄『物語日本史』p.20

皆さん、皆さんの姓名を考えて下さい。姓と名を分けて、姓だけを苗字といいます。皆さんの苗字は、何といひますか。山田ですか。木田ですか。小島ですか。村上、夏目、手塚、飯沼、依田、多田、小国、山県、清水、田尻、浅野、土岐、舟木、石川、この中のどれかではありませんか。佐竹、武田、小笠原、秋山、南部、里見、新田、大館、今川、畠山、細川、この中にありませんか。これらは源氏ですよ。しかも清和源氏といって、清和天皇から出ているのです。そしてその清和天皇は、神武天皇の御血統を受け継がれたお方であり、神武天皇を第一代として、第五六代の天皇でおありになるのですから、上にあげた苗字の人人は、近くは清和天皇、遠くは神武天皇をご祖先としているのです。「僕の家の苗字は、違うんだ」というのですか。それでは何といひますか。村岡ですか。三浦ですか。畠山ですか。相馬、梶原、北条、名越、金沢、伊勢、杉原、和田、千葉、この中のどれかですか。これらは桓武平氏といって、元は桓武天皇から出ているのです。そして、その桓武天皇は、神武天皇の直系、第五〇代に当たられるのです。またこれらとは別に、近藤とか、進藤とか、武藤とか、尾藤とか、呼ばれる家があります。佐藤や加藤、後藤、斎藤になると、いっそう多いでしょう。それらの家は、林や、富樫、竹田、河合、稲津、結城、松田、佐野、波多野などと同じく、祖先をさかのぼる時は、左大臣藤原魚名から出ている。魚名は今より千二百年ばかり前の人ですが、魚名の祖父は不比等、不比等の父は大織冠藤原鎌足、その鎌足が天智天皇の重臣であったことはいまでもなく、もつとさかのぼれば、太古から皇室の重臣であって、神武天皇にお仕えした天種子命から出ているのです。してみれば、斎藤も加藤も、佐藤も後藤も、そのほか、上にあげた家々は、神武天皇の重臣として、建国の大業をお助けした英傑の子孫であること、明らかでしょう。

【補充資料②】紀宮様が平成15年のお誕生日に際して述べられた言葉

「皇后さまがこれまで体現なさってこられた『皇族のあり方』の中で、私が深く心に留めているものは、『皇室は祈りでありたい』という言葉であり、『心を寄せ続ける』という変わらないご姿勢です。ご結婚以来、障害者スポーツや青年海外協力隊を始めとする多くの活動が、両陛下が見守られ弛みなくお心を掛けられる中で育ち、発展していきました。また、戦争や災害犠牲者の遺族、被災者、海外各国の日本人移住者、訪れられた施設の人々などに対しては、その一時にとどまらず、ずっとお心を寄せ続けられ、その人々の健康や幸せを祈っておられます。良きことを祈りつつ、様々な物事の行く末を見守るという姿勢は皇室の伝統でもありますが、決して直接的な携わり方ではないにもかかわらず、その象徴的な行いが、具体性を持った形で物事に活かされ、あるいは人々の心に残っていることは、感慨深いものがあります」